

なぜ伝統的な

工法なのか?

木造住宅の今日的課題 つくり手の 意見 第2回

木造住宅の今日的課題に対するつくり手の意見第2回目。最近よく話題にのぼる伝統構法の再評価だが、設計事務所や工務店が取り組むだけの意味はどこにあるのか。職人仕事をいかした伝統構法の「木組みの家」を住まい手に提供する(有)松井郁夫建築設計事務所代表の松井郁夫さんに聞いた。

木組みの家に取り組むのは、日本の森林や職人を元気にしたいから。技術やデザインの問題だけじゃない。

「木の家」というと、るのは当然ですし、それ数寄屋なんかをやっているは分かります。しかし、る人もいるし、民家型住宅は構造だけで成り立つ宅で町場の仕事をやってわけではありません。そいる人もいます。あるいは、ここにある暮らしも、社会的要因も、環境的な要因も、すべて総合して人のたりでいって木の家を住まいになるわけですね。整理しないと、過性の私たちは無垢(ムク)ブームで終わったたり、ブの木を組み上げた本格的な伝統構法の「木組みの家」を取り組んできまして、心配です。が、どうしてそんなことをしないといけないんですかという問いに、隅をつつくような木造論で、明快な答えが必要ですね。エンジニアであれ、目標なしに技術を学ば、技術要素を重視せんし、住まい手にして

日本の国を元気にするために 新しい共存共栄理念を再構築する

つくる方もよかった。住む方もよかった。みんながよかったと言える社会をつくるために家づくりがある。

うちに来るお客さんというのは、伝統的な技で、子どもの頃過ごしたを現代に生かして未来に家にもいままんではいる方をつなげる大工職人によるは多くありません。ほと手づくりの家です」と最近20年、30年で住み替初に伝えます。「質を求めています。そして家族める時代になったと言っていると困らした部屋の記憶のであれば、ほんとの意味で循環型の止まらな家をの前にテレビが鎮座ましつくりたいといけません。ましてと言われる方がほそれには、もうすでに答とんです。それは戦後えはあ。これまで先祖のアメリカナイズされたたちがつくってきた家の商品型の家であり、非常なかに答えはあるから、に寿命が短い家ですね。それを見直しましょう。」

も、自分の家にほんとは、少しだけさだけど日価値があるのかと疑いな本の国も元気になる。そこから暮らすようでは困う思っています。そこをますから。柵に上げて「わが技術」なぜ木組みの家なのかの話ばかりになってしまという、身近にある森うと、たぶん道を誤るだ林や職人の仕事を守り継ろうなど。このことは、承することがいま非常に同業の人に一番強く言いたい大切なことだ。たいですね。山と職人が元気になる

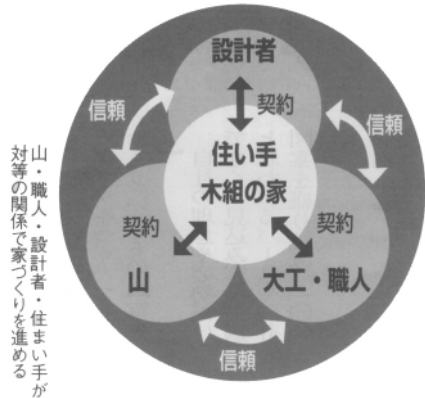


松井郁夫さん
(有)松井郁夫
建築設計事務所代表

1955年福井県大野市生まれ、79年東京芸術大学大学院美術研究科修了。85年に同事務所を開設し、92年にまちづくりデザイン室を併設。2003年「ワークショップ「き組」」を発足。日本各地の伝統架構技術を訪ね、現代の木造建築へ生かす道を研究・実践する。NPO緑の列島ネットワーク理事。ものつくり大学講師。東京都中野区 03-3951-0703 <http://matsui-ikuo.jp>

は、なにも物質であふれたものではない。いかもしれない。誰かがむしろ、つくる方もみんな勝つて誰かが負けるというながよかった、住む方もう産業構造になつてしまみんながよかったと言えつたために、いままざるような、そんな社会をまにかしなことが起こつくり出すために家づくっているのではないでしりがある、そこに豊かさ

木組みの家プロジェクトの体制



山・職人・設計者・住まい手
対等の関係で家づくりを進める

